

あなたを癒やす

第225回

安心伝身

ふーん、ナルホド

むち打ち症に潜む危険 軽度外傷性脳損傷

交通事故によるむち打ち症は、頸椎の障害と思われがちだ。しかし、事故後に味覚や嗅覚の障害、四肢の麻痺、視野狭窄など、脳の障害を示す症状が現われることがある。これが軽度外傷性脳損傷だ。脳の情報伝達を担う軸索が徐々に破壊されて起り、CTやMRIなど画像検査では異常が見つかりにくい。転落やDV、乳幼児揺さぶられ症候群(SBS)などでも起こるので注意が必要だ。

イラスト／いかわやすとし



交通事故などによるむち打ち症は外傷性頸部症候群と呼ばれ、頸部の痛みと運動制限が主症状だ。ところが、事故後数時間から数日経過してから嗅覚や味覚の障害、難聴、記憶力や理解力の障害、集中力が低下する高次脳機能障害など、脳の障害による症状が現われることがある。これが軽度外傷性脳損傷だ。欧米では1950年代にむち打ち症により、実験動物の脳が損傷されることと発見されたが、日本では脳ではなく、頸椎の病変が研究の対象となってきた。

軽度外傷性脳損傷の存在に

注目した、湖南病院(茨城県下妻市)の石橋徹院長の話。「2004年頃、むち打ち症で来院した患者に、頸椎疾患ではない脳の症状が見られたことから、神経内科と脳外科に紹介しました。しかし、CTやMRIの画像検査では異

常が見つからず、何でも無いということでした。そこで、原因を明らかにするために文献を調べたところ、軽度外傷性脳損傷であることがわかりました」
軽度外傷性脳損傷は、事故の衝撃で、脳の中の「軸索」と呼ばれる神経を覆うケープルが損傷し、時間とともに損傷の程度が進み症状が現われる。受傷時に軸索のそばを走る血管が損傷されると出血が起り、CTやMRIで脳病変が見つかるが、出血後に吸収されて画像に現われないこともある。

また、脳損傷は受傷時の意識障害の重さにより軽症、中等度、重症と分類されるが、軽度外傷性脳損傷では事故直後は意識障害が軽微でも、時間が経つと症状が重症化することがある。大部分は3か月から1年で回復するが、1割前後は慢性化して後遺症に苦しむ。特に若年層では被害が甚大だ。



石橋 徹
湖南病院院長

軽度外傷性脳損傷の症状

高次脳機能障害	記憶機能低下、理解機能低下、注意・集中力低下、遂行能力低下、性格の変化など
脳神経関連の障害	嗅覚障害、視力の低下、視野の欠損、眼球の運動障害、顔面の温痛覚の鈍麻、咬合麻痺、味覚障害、唾液や涙腺の分泌低下、聴力低下、嚥下困難、誤嚥、顔面神経麻痺、四肢麻痺など

※時間の経過とともに、上記の症状が複合的に出現することもある

軽度外傷性脳損傷は、交通事故のほか、スポーツ外傷、転落や転倒、家庭内暴力、乳幼児揺さぶられ症候群など、様々な原因で起こる。アメリカではアフガン・イラク戦争での、爆風による患者が新たに増え、社会問題化している。2007年、世界保健機関(WHO)は全世界で毎年1000万人が外傷性脳損傷に罹り、うち90%が軽度外傷性脳損傷であるとして、全世界に向けて対策が急務であると警告している。なかなか治らないむち打ち症は専門医の受診が不可欠だ。

(取材・構成／岩城レイ子)